

## やはぎウィークリー

## 明治の『押井村誌』現代語訳

新見克也

の食料に充てるのに過不足はない——

## 《師と健康》

——本村には従来医師はおらず、病気にかかる者があると大変困る。かつ山間の狭隘な地であるので、空気の流通が人身に適當ではなく、衛生にも不便な地である。ただし、旧二井寺村の分域は新鮮な空気が流通し、大いによろしい。

## 《伝染病》

——文政6年5月から7月までの間、伝染病（病名は不詳、容体は激しい下痢）にかかり死亡する者が20名いた。村民でこの患難を逃れたものは3戸に過ぎない。ただし、旧押井村ではあったが旧二井寺村にはなかった。

文久2年に麻疹が流行し27～8歳以下は乳児にいたるまで逃れた者はなかった——

この村誌は地元の町内会長が持ち回る筆筒に収納されて大切に引き継がれてきたという。傷みがひどいので「ふるさとアーカイブ事業」としてデジタル化され、今回、現代語訳も行われた。

こうした古い資料が地域に残されている例は他にも少なくないと思う。市のわくわく事業補助金を使うなどして現代語訳にチャレンジしてみると、地域の再発見につながり、自分たちが地域で大切にすべきものが見つかるかもしれない。おもしろそうだ。

わくわく事業で挑戦してみても

豊田市旭地区「押井の里」のホームページに、明治14年起草の『押井村誌』がデジタル化してアップされている。この度、そこに現代語訳が追記されて誰もがその内容を楽しめるようになった。

現代語訳を担当した地域自治研究家・佐藤則子さんの解説によると、この「押井村」は明治11年～22年の制度が移行するはざまに存在した村で、『村誌』は江戸時代の暮らしが残る山間の村に明治の新制度が押し寄せてきた時期に編纂されたものだという。

村誌だから内容は村の概要から始まって幅広い。村民の暮らしぶりに触れたおもしろい項もあるので少し紹介しよう。

## 《村民の常食》

——本村の人民の常食は米・麦・野菜のみである。村内で得られる米・麦・野菜は1年